大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

長谷寺史の問題点

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上田, さち子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017506

長谷寺史の問題点

上田　さち子

一　はじめに

私はかつて「大和盆地周辺の初期修験について」と題する小論において、鎌倉初期までに現在の形に編集された修験の縁起である「諸山縁起」を扱い、「諸山縁起」を構成する大峯、笠置、葛木のうち、大峯は生命をかけた行者のプロの山、笠置は行者でない高僧も参加しうるミニ行場、葛木は本来民衆の宗教活動の場であって、その三者が相寄り依存しあって大和盆地周辺の初期修験を構成すると論じた。[1] それについては、私のゼミの卒業生であり登山家でもある駒澤大吾氏から、葛城山の山頂は行者の領域であり、山腹とは区別して考えるべきだとの指摘をうけた。それはその通りであろう。しかしその他は、おおむねこれでよいのではないかと、今も思っている。けれどもその際、大峯と笠置の中間に位し「諸山縁起」がふれない三輪、長谷、室生の位置づけについては力及ばなかった。本稿はその課題を引き継ぐものである。

「諸山縁起」を扱う前に、卒業生の目片（現姓・森）郁江氏と私は、「中世三輪の宗教的特質」[2]において、三輪が、笠置―金峯山という修験の拠点を結ぶ南北線と、二上山―長谷―室生―伊勢という古代以来の政治の道である

とともに宗教史上特別の意味を持つ地点を結ぶ東西線の交差点に位することに注目し、その地理的環境を踏まえて中世三輪の宗教的特質を考えていた。三輪の地は、古代、天皇家の勢力基盤であり、天皇家に従って大神一族が栄えた所である。大神神社の鎮座を物語る記紀神話は、雷神である三輪の神が丹塗矢もしくは端正な青年に化して美少女と婚し子を生ませる三輪伝説としてひろく知られている。平安時代以降、大神神社は二十二社に列し、また大和国の一宮として崇敬された。福を授けてくれる巳（蛇）さん、酒造りの神として、その摂社狭井神社とともに疫神・薬神として民衆の信仰も集めた。鎌倉時代には西大寺叡尊が三輪流神道を興した。こうした三輪より先に、長谷には伊勢との関係がつき、初期神道が芽生える。本稿ではそのような三輪の姿を前提にして、長谷の複雑な宗教状況をどのように考えるかを問題にしてゆきたい。

なお、本稿を書くにあたって、逵日出典氏著『古代山岳寺院の研究1　長谷寺史の研究』『古代山岳寺院の研究2　室生寺史の研究』を全面的に参考にさせて戴いた。この二書がなければ本稿の構想はとても持つことは出来なかった。心から感謝している。本稿のなかで通説的な箇所及び周知の史料は、この二書の詳細な記述に甘えて註を省略した。また、史料で問題がないと見られる部分は、永井義憲氏編『長谷寺編年資料』『長谷寺文献資料』を利用させて戴いた。学恩と、拝借した広島工業大学にお礼申し上げる。

二　長谷寺の現況

長谷寺の信仰の歴史は、大きく見て、十一面観音の造像と長谷寺の草創期、平安時代の長谷詣での盛行期、平安末・鎌倉時代の伊勢・春日信仰との結合、瀧蔵権現から与喜天神への鎮守神の交替、西国三十三所札所第八番霊場化、桃山時代における興福寺の衰退と真言道場化、明治時代の真言宗豊山派総本山としての独立という経過をたど

るであろう。そして元より現況はそれらの変遷を経た後に今日に残されているものである。しかし、変遷をへて残された現況もまた何程か長谷信仰の核を示しているだろう。それから見てゆきたい。

長谷寺は、錫杖を持ち岩盤に立つ独特の姿の像高一〇メートル余の本尊十一面観音像、断崖に舞台を張り出した本堂、仁王門から本堂に至る長い登廊で知られる。錫杖を持つ十一面観音像は儀軌になく、地蔵菩薩との習合といわれ、遊行僧の姿に想定されている。しかし、長谷寺のなかでも観光客の行かない裏山には広大な墓地が拡がる。墓地といっても山全体が近世の供養碑で埋まっているのである。古くは元禄時代のもので、形は高さ数十センチの舟形光背型や位牌型、普通の墓石型が多く、彫られている文字はほとんど戒名であるが、なかには「妙法蓮華経」の題目もある。舟形光背や位牌型の石に地蔵を浮き彫りにしたものや、小型のま四角の石に二人並んだ僧形の人物を彫り出したものもある。遠く武蔵国と読み取れる供養碑もあった。無秩序に置かれたこれらの古い供養碑群を整理して無縁墓のように並べて、跡地を普通の墓地にして分譲しているらしい状況も見受けられたが、惜しまれることであった。墓山に近い堂では盆前などに一般の人から塔婆供養を受け付けているらしく、裏手に八月七日・八日付けの一・五メートル位の塔婆が散らかっており、一メートル位のものも束ねられていた。

古代、長谷の地は、隠国の泊瀬と言われ、神のこもる地であるとともに死者のこもる地、火葬の行われる場であった。それが近世において供養碑の納め場となり、今日、火葬骨を納める墓そのものとして使用されている。少なくとも近世において、長谷寺は、観音の西国三十三所札所第八番霊場と死者供養の場が併存する所であったのだ。長谷寺には宝暦二年（一七五二）の像内墨書銘のある泰山王坐像と、同手法の司命・司録・十王像の一体があり、現在は寺の博物館施設に収蔵されている。しかし像内墨書銘には「再興始　大焔魔坊」とあり、[3] おそらくは墓山近くの「大焔魔坊」に、死者への慈悲を乞うために、なくてはならないものとしてこの時期に再度造像され、機能して

いたに違いない。

近世、長谷が供養の地であったのは、隠国の泊瀬の追憶と同時に、長谷観音が錫杖を持ち、あの世まで行って救ってくれる地蔵菩薩を思わせる仏であることにもよるであろうが、観音の出現の状況に関わる点が大きいと思われる。既に周知のように、最古の長谷寺縁起である『七大寺年表』[4]養老五年（七二一）条や『三宝絵詞』下僧宝二の「長谷菩薩戒」によると、長谷の観音は、近江国高嶋郡に漂着した霊木が、至る所で疾病や火災を起こしつつ漂流を続けて山城国から宇治河を経て長谷に至り、道明の礼拝と藤原房前の援助で十一面観音に造りあげられ、雷公降臨の盤石に据えられたものという。雷が火を呼ぶと同時に疫病神でもあることは、三輪の神や、菅原道真の事例によって知られる。また、私はかつて「蔵王権現と龍神」と「空也の二つの顔」の小論[5]で、蔵王権現ももとは龍冠の夜叉神であり、龍＝蛇を通じて雷神に繋がること、及び雷神は寿命を司る機能を持つことを論じた。とは言え三輪の神・菅原道真・蔵王権現の三者は少しづつ性格上強調される側面が異なり、蔵王権現は菅原道真のように疫病神の性格をあらわすことはない。しかし基調に龍神の性格を持つ上、盤石上に座するさまは蔵王権現と長谷観音に共通する。長谷観音は、そのような性格の神として一方では生者に現世利益を恵み、一方では死者を擁護したのではないだろうか。

なお、龍神と死者供養の結合は、伊勢の朝熊山でも見られる。私は一九九五年十一月朝熊山に行き、たまたま経塚でお会いした地元の清水達夫氏にご案内戴いて八大龍王を祀る山上に登った。そして清水氏に導かれて廃道に近い急斜面の旧道を下った。そんなに長距離ではなかった。下りた所は驚いたことに金剛證寺の奥の院であった。金剛證寺の奥の院は、朝熊山の嶽詣りとして知られる死者供養の場である。この地の八大龍王と死者供養の隣接は、長谷観音と裏山の供養碑と同性格と思われる。近世にそのような状況を呈する地に、中世の長谷には初期神道が興

り、近世の朝熊山は「お伊勢参らば朝熊をかけよ、朝熊かけねば片参宮」とうたわれて、伊勢神宮に参詣する人々が併せて金剛證寺まで足をのばすことが一般化し、朝熊山の雨宝童子と天照大神は一体と信じられるに至った。伊勢神道とは何か、私にはまだわかっていない。しかし、少なくとも、このような状況を排斥するものではなかったことは確かである。地方的な神道に至ってはなおさらであろう。

三　草創期の長谷と室生

長谷寺創建に先立つ泊瀬の地は、瀧蔵神の鎮まる霊地であった。天武天皇はこの地を選んで斎宮を造り、大伯皇女を斎王として伊勢に送るに際して、身を潔めて神に近づくために一年半の間逗留させた。[6] そして九世紀初頭に成立した『日本霊異記』下巻第三話には、孝謙（称徳）天皇の時代のこととして、今日の長谷寺とおぼしい「泊瀬の上の山寺」の十一面観音が大安寺の下級僧侶から天武天皇の孫の船親王に至る人々の、信仰を集め、まことに世俗的な願望を叶えていたさまが描かれている。承和一四年（八四七）には長谷寺はその霊験ゆえに定額寺とされ、[7] 天暦三年（九四〇）には瀧蔵神が神階を高めて正二位に至る。[8] この頃までには「泊瀬の上の山寺」「長谷山寺」という呼び名は消えて「長谷寺」の名前が一般化するとともに、程なく華やかな貴族の長谷詣でが始まる。長谷観音の霊験・利益はますます喧伝されるが、それと裏腹に長谷観音から雷神の要素が薄れてゆく。正確に言えば観音の要素が参詣者に喜ばれて、雷神の要素を発揮する余地がなくなるのであろう。しかし、雷神の要素はあくまでベースとして保持し続けて、それが後の与喜天神勧請に繋がると考えられる。

このような長谷にたいして室生は、火山活動で出来た独特な地形で、古くから「ムロ」「ミムロ」として神の宿る聖地であった。この地を流れる室生川が重要な水源であるため、早くから水神の信仰がおこり、奈良時代後半か

ら三つの洞窟に龍穴信仰が盛んになる。桓武天皇は皇太子の時自らの不預により伊勢以下の天下諸神に奉幣したが、その時室生山中で浄行僧五人に延寿法を修させ、後に国家のためとして室生山寺を創建した。開祖賢璟は尾張国出身の興福寺法相宗の学匠であるとともに、民間遍歴の修験僧満願開創の伊勢国桑名郡多度神宮寺に三重塔を建立したことで知られる人物である。[9] 薗田香融氏[10]や逵日出典氏は、賢璟は尾張大僧都と呼ばれるほどに在地性のつよい人で、大和―尾張間を行き来していたと考えられ、そのため早い時期に室生の地に着目していたと想定しておられる。賢璟のあと室生山寺は弟子修円らに引き継がれ、興福寺の拠点・修行の場となってゆく。賢璟が長谷寺に来たという伝承もあるが、当時長谷は東大寺の勢力下にあり、それは考えないほうがよいだろう。むしろ、室生と長谷は、距離的に近く、ともに龍神信仰を基調とする寺でありながら、室生の雨乞い信仰と長谷のより大衆的な観音信仰というように、宗教活動を分かってゆくのではないだろうか。その他に、室生寺では天井裏から三万七千基にのぼる籾塔と呼ぶ木造小宝篋印塔が発見されているが、[11] 現在に至るまで死者供養の場になった形跡がないのも基本的な違いといえよう。

四　伊勢信仰の萌芽

逵日出典氏の永井義憲氏説の紹介によれば、『蜻蛉日記』中巻の天禄二年（九七一）の長谷詣でに「おとせでわたる森」が見えるが、それは瀧蔵神とともに重要な長谷東の山の尾の山口神で、祭神は本来大山祇命であったが、ここに「おとせでわたる森」とされているのはそれが手力雄神に変わっていることを意味し、この森に祀られている手力雄神が人の声を奪う神であるとの信仰が拡がっていることを示すという。事実であれば、それはこの地への伊勢信仰の浸透の一端を示すであろう。

十世紀末は長谷寺において東大寺から興福寺への勢力交替の時期であるが、遠日出典氏によれば、これ以後、特に院政期において春日信仰と伊勢信仰が結合してゆく傾向があるという。久保田収氏によれば[12]、早くは『扶桑略記』寛治七年（一〇九三）八月二十二日条に「我大日本国者。依天照大神勅天児屋根命之扶持力也。」と見えていて、わが国は天照大神の勅と天児屋根命の扶持とによって護持されるとの思想が示されている。藤原兼実は以仁王の挙兵に際して『玉葉』治承四年（一一八〇）五月十六日条に、「愚意案之、我国之安否只在于此時歟、伊勢太神宮、正八幡宮、春日大明神、定有神慮之御計歟、」と、この三社を並べている。伊勢と八幡は国家の宗廟である。八幡は同時に僧形八幡として遊行僧や地蔵のイメージと結びつき、念仏擁護の神でもあった。それにたいして春日は兼実もその一員である藤原氏の氏神である。鎌倉幕府が成立しようとする十二世紀末、落日の藤原氏は積極的に伊勢の権威と八幡信仰の拡がりに氏神春日明神を結合させて権威の維持をはかろうとしたであろうし、ことに中央の劣勢とは裏腹に長谷では東大寺を追い勢力を伸ばしていた興福寺・春日勢力は、勢いをもって、その手段として伊勢信仰を拡めるのに一役かっていただろう。そうした動きは、時代が下るとともに政治の論理ではなく宗教の論理としての三社託宣を成立させてゆく。すなわち伊勢・八幡・春日の三神に正直・清浄・慈悲を配して全体として一つに結びつけ、やさしい神道の教義としたものである。

鎌倉中期の仁治三年（一二四二）には叡尊が長谷寺に参詣し一〇四人に菩薩戒を授けている[13]。それ以外に叡尊が長谷へ来た形跡はない。しかし叡尊は大神神社の神宮寺大御輪寺を再興しここで三輪流神道を興す。長谷の伊勢神道の萌芽と叡尊の神道との関わりは私にはわからない。だが長谷寺には膨大な三輪流神道書が残されている。長谷寺に新しい神道思想を受け入れる素地があったことは疑いない。それは単に長谷が伊勢への交通路に当たるとか、藤原氏の努力よりももっと根本的な問題であるように思われる。それについてこれから考えたい。なお、ほぼ同時

期に室生でも室生流神道（一一神道。べんいちと読む）が興り、両者はともに両部神道で相互に影響しあっていたが、別派を通した。

五　長谷信仰の現世的性格　―夢と僧と童子と―

平安時代には貴賤を問わず多くの人々が長谷詣でに訪れたが、とりわけ貴族女性の華々しい参詣・参籠が目を奪う。参籠は、昼は御堂へ籠もり、夜は宿坊へ下がる生活を何日か続けて祈願することである。御堂での祈願には「局」が与えられてそこに籠もって祈った。祈願の内容は多くの場合財産・将来の幸せ・子宝・除災などを求めるものであった。

では観音はどのようにして願いを叶えてくれるのであろうか。『源氏物語』の玉鬘のように観音の利益により出会いに恵まれ幸せを得る場合はもとより多いが、夢の告げに従って幸運にたどりつく場面も目立つ。『今昔物語』巻十六の二十八の有名な薬しべ長者の話や、『閑居友』下巻五の長谷観音に月まいりする女が夢の告げに従って他人の薄絹を盗み、それがもとで盗んだ女も盗まれた方も幸せになる話が典型的なものである。一方で、夢の告げが必ずしも実を結ばなかった話に『更級日記』の代参して鏡を奉納するくだりがある。

『今昔物語』の薬しべ長者の話では、夢に僧が御帳の中から出て来て告げを与える。それが僧であることに注意したい。

『長谷寺霊験記』[11]は『長谷寺観音験記』とも呼ばれて、長谷寺創建以来の特記事項と長谷観音の霊験あらたかなさまを書き上げた書物である。最後の下巻第三十三話が高倉院の御宇で写本の上限が鎌倉末期であるから、鎌倉中期には成立していたと思われる。創建以来の特記事項については後に触れるが、霊験譚を見てゆくと、観音の利益

をもたらす存在が多く僧と童子であることに気づく。例えば、『今昔物語』の蓁しべ長者の話のように帳の内や内陣から貴僧が出現する話には、下巻第二・十二・十三・十五・十八・十九・二十三・三十二・三十三話等がある。

もっと多いのは童子の出現で、例えば上巻第十九話では、藤原頼通の参籠時に童子が内陣の脇から美しい箱をもって現れ、箱の中の巻物を見せ、これは未だ利益定まらぬものの交名であると告げた、その交名の中には頼通の名もあったという。これなどは露骨に参詣と経済的な援助を強要する話ではあるが、それを告げに来るのが童子である。下巻第一話では、落ちぶれた翁が両親の供養をしたいと信濃国善光寺で祈っていると、忽然と僧が現れ、大和国長谷寺へ参詣して自身の現当二世と二親の菩提を祈れと言った。僧は金色の阿弥陀仏の化身であった。そうはいっても、まだ長谷寺ができていない時代のことである。長谷の地へ来ても寺も観音もなかった。光を放つ所を礼拝して三年、夢に十七八才の童子が現れて、明日最初に会った女を妻にせよと言った。夢さめて郷里へ向うと程なく童子を連れた女に会って結ばれた。翁は本国に帰り、荘園領主から妻を奪われそうになるが、妻と童子の力で救われ、妻とともに幸せになり、自分の敷地内に新長谷寺を造った。その後、妻は、自分は長谷寺の地主瀧蔵権現で観音の御使に現れたと言って消えた。連れた童子は長谷の山口の神であった。

下巻はほとんどが童子出現の話であるが、この第一話は地主神瀧蔵権現と長谷山口神が女と童子として現れる点で特に興味深い。いわば、観音の利益は事実上童子である地元神の利益なのである。自然の息づく地元神こそが、霊地の神秘的な力でもって夢で未来を告げ、幸せに導いてくれる。

ここでもう一つ興味深いのは、『長谷寺霊験記』序文で「天照大神宝石瑞光ヲ見テ。手力雄ノ神ニ勅シテ言ク。此山ハ我本有相応ノ地。汝降〔化〕有縁ノ砌也。汝自今以後永ク此所ニ居シテ後代ニ上人来テ我山ヲ崇メント共ニ此山ヲ治シテ君臣国土ヲ守リ治ヨト云。則手力雄命深ク神勅ヲ受テ永ク此山ニ住シ。鎮護国家崇神トシテ。天照大

神ノ冥慮ヲ本願上人ニ告テ此伽藍ヲ立ツ。（中略）長谷山口神ト云是也。」と言い、明瞭に伊勢との繋がりを語っていることである。三輪流神道はまだ『長谷寺霊験記』に入ってはいない。ここからは私の推測に過ぎないが、長谷観音と伊勢が向き会うだけならば、この早い時期に伊勢信仰がすんなりと長谷に入ってゆくことが出来たであろうか。伊勢信仰が長谷に入ってゆくことが出来たのには、長谷観音の側からも伊勢からも、神であり童子である地元神の活動が媒介項として機能した点が大きかったと思われる。女や童子が瀧蔵権現や山口神でなければならないということもないようで、例えば上巻第十七話・下巻第二十九話では長谷寺の伽藍守護の石精童子が活躍しているし、下巻第一話に含まれる別の話では長谷観音自身が童男の身を現じて行基のために釈迦像を造っている。童子というだけで、地元神・自然のなかの神と同じ力能を持つようである。ゼミ卒業生の天鶯靖司氏は、卒業論文「日本人の他界観念―葬・墓制を中心に―」において、僧や童子がこの世と他界の境界的存在であるといわれているが、それは異界・他界を含んで長谷寺の場合にもあてはまると思う。夢もまた現実と神秘の世界の境界現象に違いない。長谷は夢・僧・童子という形で、観音よりもむしろ自然の霊場から現世利益を恵まれる場であると考える。それが初期神道を呼び込む要因である。なお、『長谷寺霊験記』は現世利益譚を中心とするが、下巻第二十三話等のように往生祈願も含まれることをつけ加えておく。

六　近世における長谷の位置

長谷寺は鎌倉時代に地主神を瀧蔵権現から天満天神（与喜天神）に変えるが、それは既に『長谷寺霊験記』上巻第十一話に現れている。瀧蔵権現自身が「大聖ノ化儀ヲ助ケ奉ン為メ。本居ノ山ヲ出テカヽル憒鬧ノ塵ニ交ル。我

レ静ニ本居ノ山に隠遁シテ遠ク此ノ伽藍ヲマモリ。時々コノトコロニ来テ大聖ニ値遇シ奉ント思フ。」と言っているように、長谷寺の盛況はもはや瀧蔵権現の霊地を必要としなくなっていたのだろう。かわって鎮座した天満天神は連歌の神として室町時代以降新たな結縁者を呼び込み、今日長谷寺に応仁二年（一四六八）経覚大僧正筆の『連歌新式』四幅と観応二年（一三五一）書写の『僻連抄』、多数の天神画像、膨大な連歌を残すことになった。[13] 財政的にも豊かで、享徳二年（一四五三）には天竜寺・多武峯妙楽寺とともに遣明船を出す程であった。[14] しかしそれが宗教上新しいものを切り開いたかと言うと、逆にわからなくなってしまう。三輪流神道も、近世において、刊行されている『大神神社史料』第五巻の四百ページを占めるほどの文献を書写・架蔵しながら、それがどのように生かされたかは判らない。近世の長谷寺を特徴づけるものは天正十一年（一五八三）の根来寺専誉の入寺と新義真言宗の根本道場化である。[15] 新義真言宗の根本道場として長谷寺は、明治になって学林を発展的に解消して東京に進出し豊山大学から大正大学へと育成してゆくほどの力量を蓄えていた。それにもかかわらず、である。一方で長谷寺は観音の西国三十三所札所第八番霊場として多くの巡礼者を迎えた。元禄時代以降墓石が普及すると、裏山が供養碑で埋まるようにもなった。三輪流神道と新義真言宗の根本道場と観音札所と死者供養との併存である。それを統一する論理は近代人には出て来ない。しかしそれが現実であるならば、私たちは特に地方的神道をそのようなものとして考えるべきではないだろうか。それは伊勢の伊勢神道はもとより、三輪や叡尊の伊勢信仰ともかなり違ったものである筈である。伊勢や叡尊の神道は、お祓い機能によって成り立っていたと思われる。[16] 長谷には部分的な清浄しかなりたたないであろう、だから観音さんが秘仏にできないのだ、とまでは言わないにしても。

長谷・室生は近接し互いに似た出発をし、伊勢への道に位し、神道にかかわった寺でありながら、両寺の歴史は開創者徳道・道明、賢璟・修円の時代以来現在まで機構的に交わることはなかったと思われる。現在も、同じ真言

宗でありながら片や豊山派、片や室生寺派の本山である。何故そうなるのか。確信は持てないが、特に長谷は、吉野―笠置の道、伊勢―三輪―二上山の道、京都からの道に繋がり、何でも入ってくるありとあらゆる人々に開かれた寺であった。その一方で適度の距離感のある里山の信仰道場として、周囲の宗教施設とは比較的没交渉に終始した。本稿ではそのように長谷寺を位置づけたい。

〔註〕

(1) 大阪府立大学『歴史研究』28・29合併号　平成二年三月

(2) 大阪府立大学『歴史研究』27号　平成元年三月

(3) 『大和文化研究』第五巻二号　二二頁　大和文化研究会発行　昭和三五年二月

(4) 『続群書類従』第二七輯上所収

(5) 『月刊百科』三三九号　平成三年一月　及び　三四六号　平成三年八月　平凡社

(6) 『日本書紀』天武天皇二年四月　及び　三年一〇月条

(7) 『続日本後紀』承和一四年一二月二五日条

(8) 『日本紀略』天慶三年九月四日条

(9) 『平安遺文』第一巻二〇　多度神宮寺伽藍縁起資財帳

(10) 『平安仏教の研究』所収「草創期室生寺をめぐる僧侶の動向」

(11) 『奈良県史』第六巻　寺院　五九六頁

(12) 『神道史の研究』所収「春日大社と天照大神」

(13) 『西大寺叡尊伝記集成』所収「感身学正記」

(14) 『続群書類従』第二七輯下所収

(15) 『大和文化研究』第五巻二号　三八～四二頁　大和文化研究会発行　昭和三五年二月

(16) 目録『長谷寺名宝展』略年表　一七五頁　平成四年七月　『長谷寺編年資料』一九五頁

(17) 『奈良県史』第六巻　寺院　三八九頁

『大和文化研究』第五巻二号　三頁　大和文化研究会発行　昭和三五年二月

(18) 『月刊百科』三七一号「伊勢への道」下　四一頁　上田さち子　平成五年九月